

## 激増するミシシippアカミミガメ～淡路島の悩ましいカメ事情～

和亀保護の会 西堀 智子

### ●はじめに

2016年から2017年にかけて環境省のミシシippアカミミガメ（以下アカミミガメ）の防除事業の一環として、兵庫県内においてアカミミガメを中心としたカメ類の目視調査を行った。その際、淡路島中部～南西部で非常に多くのアカミミガメを目視確認した。またニホンイシガメ（以下イシガメ）を見ることは非常に少なかった。一方2010年に松久保晃作氏が行った調査ではアカミミガメが生息確認された地点はごく僅かで、反対にイシガメはあちこちで確認されていた。つまりほんの数年で淡路島のカメ事情は大きく変化したことになる。それは一体何に起因するのか明らかにするため、さらに調査を継続した。

### ●淡路島の地形の特徴と水辺

淡路島の地形は、山地により大きく4つに分けられる。南東部の非常に起伏の大きな論鶴羽山（608m）を中心にした論鶴羽山地、南西部の200m級の低山が分布する地域、妙見山（522m）を中心とする津名山地北部、先山（448m）を中心とする津名山地南部である。そして、津名山地の南縁と論鶴羽山地・南東部の低山の北縁の間に淡路平野が広がる。南東部は海岸に向けて傾斜の大きな細い川が何本もありため池は少ないが、その他の地域では丘陵地や台地、平野に夥しい数のため池が散在する。兵庫県は日本一のため池数を誇るが、その半数以上の23000が淡路島にあり、それらは多くの河川や水路とともに農業用水のネットワークを構築している。カメ類生息の動静もまたそれらに拠るところが大きい。

### ●調査期間・場所・方法

調査は事業で行った2017年8月30日～11月1日とその後の2018年9月16日～10月20日の間に行った。偏りのないようにランダムに選んだ島内の水辺200カ所（河川64カ所、ため池136カ所）で、目視（裸眼・双眼鏡）により、アカミミガメを中心にカメ類の在不在を確認した。ただし洲本市の中心部など、すでにアカミミガメが広がっていることがわかっている場所については除外した。

### ●結果

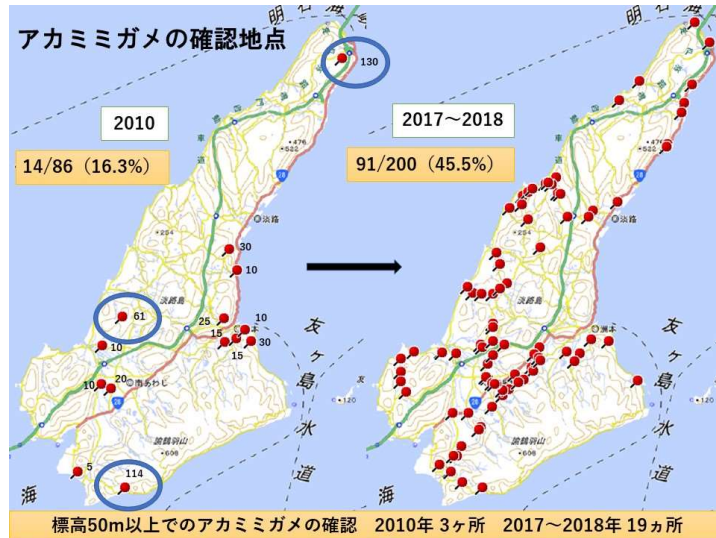
1、200カ所の調査地点のうち、アカミミガメが確認されたのは91カ所（45.5%）であった。調査地点は違うものの、これは2010年の松久保氏の調査（86カ所中14カ所、16.3%）のほぼ3倍であった。

2、松久保氏の調査でアカミミガメが見つかった標高50m以上の地点は3ヶ所、うち2カ所は公園の池など、明らかに遺棄されて定着したと推測できる場所であった。今回の調査で標高50m以上の地点は19カ所であったが、遺棄個体の定着が特に想定される場所は1カ所だった。

3、淡路島南東部の河川では2010年の調査・今回の調査ともにアカミミガメの生息は確認できなかった。南西部の丘陵地帯では、2010年の調査では未確認だったが今回は複数の地点で生息を確認した。津名山地北部は2010年では公園の池1カ所のみ確認だったが、今回は東部海岸を中心に広く生息が確認された。津名山地南部は2010年には未確認だったが、比較的標高の低いところを中心に、複数地点で確認された。また津名山地の南北の切れ目の平地で多く見つかった。淡路平野では2010年にもアカミミガメを

確認しているが、今回はさらに多くの地点で確認された。

4、アカミミガメの在不在は標高や傾斜角に拠るところが大きく、また水田面積や建物用地面積の大小に拠るところも大きかった。標高が低く、傾斜角が小さいところ、住宅密集地の周辺、水田地帯の水辺でアカミミガメの発見率は高かった。しかし今回の調査では、それ以外のところでもしばしば見つかった。



### ●考察

数年間でアカミミガメが爆発的に広がった理由は以下のことが推測される。

- 1、淡路島は気候が温暖であり、アカミミガメの成長が速い。
- 2、淡路島は河川や水路、特にアカミミガメが好むため池が多く、しかも近接しているため（ため池密度日本一）、周辺地域への移動が容易である。
- 3、水田面積は淡路島全体の14%を占め、低地だけでなく、山間の平地や丘陵地でも水田耕作が盛んであり、棚田も多く見られた。したがって平地の水田伝いだけでなく、なだらかな棚田や水路伝いに標高の高い方へも広がっていった。
- 4、逆に、標高の高いところにある公園や学校の池などに遺棄されたアカミミガメが定着・繁殖し、水田や水路を通じて一気に周囲に広がった。

### ●淡路島の水辺の現状

日本の農業全体が抱える問題であるが、淡路島でも農業人口の減少と高齢化が顕著であり、特に近年住宅から遠い水田や耕作が楽ではない棚田、その周辺のため池の管理が困難になってきている。調査の際にも特に山間で、耕作放棄された水田や遷移の進んだため池が数多く見られた。またゲリラ豪雨や台風対策で、他地域以上に河川やため池の極端な改修や埋め立ても行われている。それらはイシガメの減少に大きな影響を与えていると考えられる。実際、2010年に松久保氏は調査地点の43.0%でイシガメを発見しているが、今回の調査では8.0%にまで激減している。

住宅地に近い街中の河川やため池ではアカミミガメがどんどん広がってイシガメを圧迫し、山間の水辺ではイシガメが好む棲息環境がどんどん失われているのである。都市周辺と違って、アカミミガメ防除やイシガメ保全にたずさわる人材・予算・学習環境も少なすぎることもあって、このままでは淡路島のカメ事情は非常に厳しいと言わざるを得ない。